

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 9 日現在

機関番号：11301

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24720288

研究課題名(和文)日本古代寺院造営機構の復原研究

研究課題名(英文)A study on public organization to construct a temple of 7th-8th century in Japan.

研究代表者

徳竹 亜紀子(TOKUTAKE, Akiko)

東北大学・文学研究科・研究員

研究者番号：70552488

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：7世紀から8世紀の日本では、都城・寺院・墳墓などの巨大な建造物が多く造られた。本研究では、このうちの寺院の建造について、官司機構の面から明らかにすることを目的とする。検討に先立ち、寺院造営に関する史料を簡便に調べられるように、当該期の歴史資料を網羅的に調査して「日本古代寺院造営データベース」を作成した。これを基に、もっとも多くの史料が残る東大寺を中心に検討をおこない、東大寺の造営における人員組織と官司機構の一端を明らかにすることができた。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research is to elucidate the public organization to construct a temple of 7th-8th century in Japan. First, I have created a database. This database is a list of historical sources for the temple construction in 7th-8th century. I know that most of the things is the Todai-ji Temple. Todai-ji temple is the largest temple was constructed in the 8th century. As a result of the research, I have elucidated the management methods of public organization that constructed the Todai-ji temple.

研究分野：日本古代史

キーワード：寺院造営 東大寺 正倉院文書

1. 研究開始当初の背景

本研究に関する先行研究の動向を整理しておきたい。

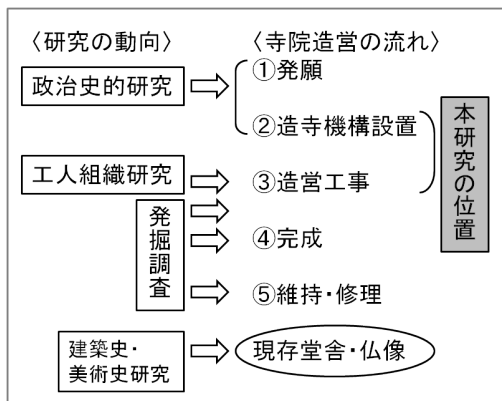
日本の古代社会における巨大建造物には、宮都・寺院・墳墓などがある。本研究が対象とする寺院については、現存する堂舎・塔、仏像を研究対象とする建築史・美術史からのアプローチと、発掘調査による考古学からのアプローチが主流である。これらの研究により、伽藍配置や堂舎規模など寺院の「形」が明らかにされてきた。

一方、文献を扱う古代史の研究では、以下のような二種類の研究が主流である。ひとつは、発願や「造寺司」の任命などの動向から、寺院と天皇・為政者との関係を論じる政治史的視点からの研究である。もうひとつは、寺院造営に関わった工人等を通して、建築・作画・造瓦などの特殊技能を世襲する氏族とその系譜を論じようとする研究である。

2. 研究の目的

1) 先行研究に対する本研究課題の位置づけ

国家事業として寺院造営が行われるためには、為政者の意志の下に、「造寺司」が組織され、その下に工人が組織され建設工事が行われるというように、→ → という段階が存在する。「1. 研究開始当初の背景」で整理した先行研究では、政治史的研究は□及び□→□を扱い、工人の研究は を扱う。また、考古学・建築史・美術史等の研究は、いわば□完成形の研究とすることができる。そうすると、□→□の過程、即ち「造寺司における組織運営」に対する問題関心が欠落しているのである。そこで、本研究課題では、寺院造営を実現した造営機構の構成と運営の復元的解明を命題としたい。



2) 本研究代表者のこれまでの研究成果

本研究代表者は、これまで「日本古代国家と寺院造営」を研究テーマとしてきた。個別寺院に関する寺院造営機構の検討もすでに行っており、「天平宝字年間における法華寺金堂の造営 作金堂所の検討を中心に」(『正倉院文書研究』9、2003年)では法華寺の造営機構、「阿弥陀浄土院造営機構の再検討」(『ヒストリア』207、2007年)では阿弥

陀浄土院の造営機構をそれぞれ検討してきた。両寺の造営を比較すると、事業的にも機構的にもかなり異なるものであったことがわかる。

法華寺の造営では、造法華寺司という造寺司が設置されたものの、金堂造営の実働部隊は東大寺の造営を行っていた造東大寺司から派遣された人々で構成された。造法華寺司という令外官司の内部に、造東大寺司官人及び関係者で構成された「造金堂所」がすっぽりと収まるという構図になる。

一方、阿弥陀浄土院の造営は、光明皇太后の一周忌齋を行う令外官司である「周忌御齋会司」が担当した。これは、周忌齋の会場として阿弥陀浄土院が整えられたためである。阿弥陀浄土院の造営は、造営とはいっても前身となる建造物の改装であったため、大規模な造営機構は必要なかった。この改装工事は東大寺大仏を造営し終えたばかりの造仏司の官人等である。そもそも「周忌御齋会司」そのものが坤宮官、造仏司、造東大寺司など光明皇太后に縁の深い複数の官司の連合体であったため、儀式準備は坤宮官、写経は造東大寺司写経所、阿弥陀浄土院改装は造仏司、というような分業体制が可能であったのである。

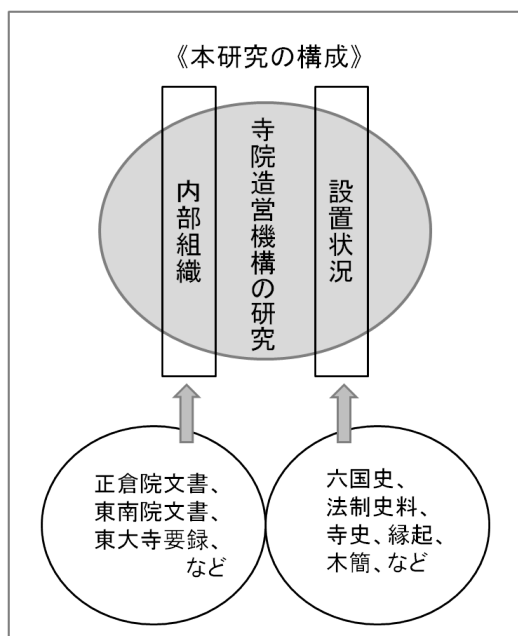
本研究代表者のこれまでの研究を通じて、正倉院文書の検討が寺院造営研究に有効であることが証明できた。ひとくちに寺院造営といっても多様な形態が存在したのであるが、いくつかの共通的な見通しを持つことができた。それは、第一に寺院造営は「造寺司」をはじめとする令外機構によって行われ、伽藍完成とともに解散されるということ、第二に「造寺司」は四等官と一部の官人・工人以外は他官司からの出向によって人員を確保しており、組織構成は流動的であると考えられることである。この二点は恐らく密接に連動する。巨大官司であった造東大寺司でさえも、ほとんどの官人を出向に頼っていたことは周知の事実である。本研究では、この見通しを検証していきたい。ただし、造東大寺司については、寺院造営完了後も廃止されることなく存続しており、他の造寺司の存在形態とは異なっている。この点にも注目する必要がある。

3) 本研究の対象と到達目標

本研究は、国家主導による寺院造営が行われた7世紀後半から8世紀を研究対象とする。それは「造寺司」が設置された時期とも重なる。なかでも、正倉院文書には東大寺造営に関する史料が豊富に残存しており、詳細に検討する必要がある。当該期の事例のひとつであるだけでなく、東大寺の造営は8世紀の寺院造営における最大規模の事業でもあり、正倉院文書の寺院造営関係史料の分析は、本研究にとって欠かすことのできないものである。

到達目標の第一は、東大寺造営機構であっ

た造東大寺司の組織構成及び造営体制の解明である。残存している史料の質・量からみて、十分に可能と考えられる。第二に、六国史や寺史史料、縁起等から7~8世紀に設置された造寺司を確定し、各造寺司の时期的な重複関係や官人・工人組織等を明らかにする。また、造寺司を設置して造営をおこなう場合と、設置しない場合とを整理し、その性格的な差異を明確にしたい。第一と第二では、使用する史料の正確が異なるが、両者によって補完しあい、寺院造営事業の全体像を解明したい。



3. 研究の方法

1) 東大寺

東大寺造営関係史料の抽出と整理

東大寺に関わる史料は他の寺院に比較して圧倒的に多い。正倉院文書、東南院文書、『東大寺要録』などから、造営や造寺機構に関係する情報を抽出し、整理する。

正倉院文書は『大日本古文書 編年』全25巻(東京大学出版会)、東南院文書は『大日本古文書 家わけ第十八 東大寺文書』第1~4巻(東京大学出版会)、『東大寺要録』は筒井英俊校訂『東大寺要録』(国書刊行会)をテキストとして用い、適宜写真版を参照しながら文字の校訂を行う。

正倉院文書の接続確認及び復原

で抽出した東大寺造営関係史料のうち、特に正倉院文書については、紙背文書であることや数次にわたる整理事業を経ている関係から、もともとの形状が失われてしまっていることが多い。そこで、歴史資料としての利用に際し、a) 第一次利用面とその時点での整理・補完状況、b) 第二次利用面とその時点での整理・補完状況、c) 近代における正倉院古文書整理事業での変更、を可能な限り把握し、原状を復原する必要がある。

復原に際しては、正集・続修・続修後集・

続修別集、塵芥文書、及び続々修の一部については東京大学史料編纂所編『正倉院文書目録』(現在6巻まで刊行)(東京大学出版会)を利用する。続々修のうち『正倉院文書目録』未刊行分については、西洋子・矢越葉子「『未修古文書目録』と『続々修正倉院古文書目録』の対照表」(一)~(三)(『正倉院文書研究』第11~13号) 飯田剛彦「正倉院事務所所蔵『正倉院御物目録十二(未修古文書目録)』(一)~(三)(『正倉院紀要』第23~25号)を参考に、未修古文書目録での掲載状況から復原を試みる。

データベース化・年表化

で抽出した史料をデータベース化し、それをもとにして東大寺造営年表を作成する。考察及び論文化

以上の作業によって得られた史料を検討し、東大寺の造営について検討し、その成果を論文として発表する。

2) その他の寺院

ここでは、東大寺以外の主要寺院について扱う。ただし、本研究の主目的は国家的造営事業であることから、氏寺などの私寺や、諸国が造営した地方寺院・国分寺などは対象から除く。

作業量が多いため、についてはアルバイトを1人雇って作業を行った。

寺院造営関係史料の抽出と整理

六国史や律令格式、縁起などから、7~8世紀の寺院造営に関わる情報を抽出し、整理する。

テキストでは、『日本書紀』は新編日本古典文学全集(小学館)、『続日本紀』は新日本古典文学大系(岩波書店)、『日本後紀』は訳注日本史料(集英社)、『令義解』『令集解』『類聚三代格』『延喜式』は新訂増補国史大系(吉川弘文館)、縁起は藤田経世編『公刊美術史料 寺院篇』(中央公論美術出版)を利用した。

データベース化・年表化

で抽出した史料をデータベース化して史料を横断検索できるようにする。IDと年代を入力することによって条件ごとに並べ替えられるようにし、それを基にして古代寺院造営年表を作成する。

考察及び論文化

以上によって得られた成果から日本古代における寺院造営の特性を考察し、その結果を論文として発表する。

東大寺とその他の寺院とを分けたのは、史料の性格が異なることと、東大寺の史料が膨大に存在するため、作業の内容が異なるためである。したがって、ここでは東大寺も含めて、日本古代の寺院造営機構について総合的な考察を行う。

4. 研究成果

1) 日本古代寺院造営データベース

7世紀から8世紀を対象に、古代寺院造営

に関する史料を収集し、データベース化した。計画当初はHP上での公開を目指したが、著作権等の問題があるために断念し、その代わりに紙に印刷してファイルに編綴した。

2) 論文「古代の作画事業と画工司」

この論文では、天平宝字2年(758)の東大寺大仏殿廂間の天井画制作を事例に、8世紀の日本における絵画制作の過程と、その際の画師の編成を明らかにした。

絵画制作には、40人以上もの画師が参加したのだが、彼等は画工司(朝廷の作画機構)、造東大寺司(東大寺の造営機構)など複数の官司から集められたほか、「里人」と呼ばれる無所属の画師等の存在も見られた。このようにさまざまな母体から召集された画師等は、画工司の画師を中心に、工程ごとに編成され直され、作画事業に当たったことが明らかにできた。

また、先行研究では「里人」の集団的性格について議論が行われてきたのだが、考察の結果、かれらはひとつの集団ではなく、正規の所属官司をもたない個人であったという結論に達した。

東大寺の造営には多くの官人・工人・雇役の人々が投入されたが、そのうち造東大寺司の正規の職員はほとんどいない。多くは、他の官司からの出向か、短期的な雇用による労働者である。本論文が扱った大仏殿廂絵作の事例でも同様の状況が見て取れる。この事例を詳細に検討することによって、多様な所属の人々がどのように組織編成されて東大寺造営というひとつの事業に取り組んだのか、という造東大寺司の活動実態に迫ることができた。

3) 論文「画所解考」

この論文では、正倉院文書のなかにある「画所解」と呼ばれている古文書について検討し、従来いわれてきたような大仏殿廂絵作画関係史料ではあり得ないこと、大規模な堂舎(おそらく大仏殿か講堂)の柱・梁・支輪の彩色に関する報告書であることを指摘した。

文書の内容と保存・利用形態の双方から検討して結論を導くという手法を用いた論考である。作画関係文書の保存・利用に関しても言及することができた点において、正倉院文書研究全体にとっても意義のある成果にすることができたと思われる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

風間亜紀子、画所解考、国史談話会雑誌、査読無、第54号、2014、pp106-121

風間亜紀子、古代の作画事業と画工司、古

代文化、査読有、第65巻第1号、2013、pp43-62

[学会発表](計3件)

徳竹亜紀子、画所解を読み解く、キリスト教文化研究所公開研究会、宮城学院女子大学、2014年6月4日

風間亜紀子、造東大寺司の成立 前身機構と初期体制を中心に、日本史研究会古代史部会、機関誌会館、2012年11月19日

風間亜紀子、東大寺の創建と造東大寺司の成立、東北史学会日本古代中世史部会、岩手大学、2012年10月7日

[図書](計0件)

[産業財産権]

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

[その他]

該当なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

徳竹 亜紀子 (TOKUTAKE, Akiko)

東北大学・文学研究科・研究員

研究者番号: 70552488

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし